石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡テーマ別研究調査報告書 4

2019年 3 月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡テーマ別研究調査報告書 4

2019年 3 月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

島根県大田市にある石見銀山遺跡は、「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産リストに記載されているアジアでも有数の鉱山遺跡です。

石見銀山遺跡では、平成９年度から島根県教育委員会と大田市教育委員会による共同調査が開始され、発掘調査や文献調査をはじめとする様々な分野での調査研究が進められてきました。その成果によって世界遺産登録を果たすことができましたが、一方で、世界遺産委員会の諮問機関であるイコモスからは国内外の鉱山との比較研究や登録の価値の証明の不十分な点が指摘され、世界遺産委員会からも石見銀山遺跡及び域内の他の鉱山遺跡との調査研究が要請されているところです。

これを受けて、島根県教育委員会と大田市教育委員会では登録後も引き続き基礎的な調査研究を行うとともに、石見銀山遺跡の価値をより明らかにしていくためのテーマ別調査研究を実施することにしました。

本報告書は平成26年度から実施した「石見銀山鉱山町の変遷」の研究成果をまとめたものです。今後も調査研究を継続して実施し、遺跡の価値をより高め、広く情報発信していくこととしております。

最後に、本研究の実施にあたり御協力頂いた関係の皆様に心からお礼申し上げます。

平成31年３月

島根県教育委員会

教育長　新　田　英　夫

例　　言

1．本書は島根県教育委員会と大田市教育委員会が、平成26～30年度に実施した石見銀山遺跡テーマ別調査研究のうち「石見銀山鉱山町の変遷」の成果をとりまとめたものである。

2．テーマ別調査研究は下記客員研究員を委嘱して共同検討会を開催しながら進めた。

【石見銀山鉱山町の変遷】

井上　雅仁（島根県立三瓶自然館課長代理）
中野　茂夫（島根大学大学院総合理工学研究科准教授）
仲野　義文（石見銀山資料館長）
藤原　雄高（石見銀山資料館学芸員）
鳥越　俊行（奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長）
西尾　克己（松江市教育委員会松江市史編纂課松江城部会長）

3．本事業は以下の体制で行った。

事務局

文化財課長　野口　弘（平成26年度）、丹羽野　裕（平成27～29年度）
　　萩　雅人（平成30年度）
世界遺産室長　松本　洋子（平成26年度）、小塚　誠治（平成27、28年度）
　　山根　雅之（平成29～30年度）
企画員　榊原　幸春（平成26年度）、内田　克己（平成26、27年度）
　　植田　晃広（平成28、29年度）、田原　淳史（平成26～29年度）
　　桑垣　正樹（平成28～30年度）、伊藤　徳広（平成30年度）
主任　難波　正憲（平成27年度）

研究員

主席研究員　熱田　貴保（平成26～29年度）、今岡　一三（平成30年度）
専門研究員　東山　信治（平成26、27年度）、守岡　利栄（平成29、30年度）
主任研究員　矢野健太郎（平成26～28年度）
研究員　伊藤　大貴（平成29、30年度）
嘱託員　小杉紗友美（平成26、27年度）、清水佳那子（平成30年度）

大田市教育委員会石見銀山課

課長補佐　中田　健一
主任　生田　光晴、清水　拓生
嘱託員　新川　隆、尾村　勝、西尾　克己（平成29年度まで）

4．本書の編集は島根県教育庁文化財課世界遺産室で行った。

目　　次

石見銀山遺跡テーマ別調査研究の経緯と目的（今岡一三）…… 3

陶磁器からみた鉱山町の変遷（新川　隆）…… 5

昆布山谷・出土谷の景観と変遷（西尾克己、新川　隆、尾村　勝、今岡一三）…… 23

菅相窯跡測量調査報告（熱田貴保、尾村　勝、新川　隆）…… 55
　付論　大森町を中心とした施釉赤瓦について（熱田貴保）…… 73

大森町における重立町人の屋敷について（清水拓生）……縦組64…… 97

近世後期大森町における屋敷地割の復原（生田光晴）……縦組49… 112

近世後期石見銀山における茶の湯と交流（清水佳那子）……縦組38… 123

熊谷家の沿革と家業（藤原雄高）……縦組27… 134

陣屋町大森の構造と特質（仲野義文）……縦組11… 150

中近世移行期の石見銀山周辺における地域社会とその変容（伊藤大貴）……縦組１… 160

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山鉱山町の変遷

石見銀山遺跡テーマ別研究調査報告書 4

石見銀山遺跡テーマ別調査研究の経緯と目的

今　岡　一　三

1．はじめに

島根県と大田市では、石見銀山遺跡の世界遺産登録を目指して平成８年度から基礎調査研究（考古学的研究、歴史・民俗学的研究、自然科学的研究）を実施し、その成果があって平成19年７月に世界文化遺産に登録された。しかし、石見銀山遺跡については、その価値がわかりにくいと言われることもあり、登録後の平成20年度からは、遺跡をより理解しやすく、その価値をさらに高めるために、今までの基礎調査研究に加えて、テーマを絞った短期間で集中的に調査研究を行うためのテーマ別調査研究を開始することになった。

2．テーマ別調査研究の経緯と経過

テーマ別調査研究は「石見銀山の歴史」と「アジアの鉱山比較」という２本の大きなテーマを柱として、およそ３年周期で完結する共同調査研究として位置づけられた。考古学、文献史学、歴史地理学、地質学、鉱山学、植物学など多分野の研究者を客員研究員として招き、年２～３回の共同検討会を開催しながら地元研究者との共同研究として進められている。

第１期のテーマ選定にあたっては、長年にわたって実施してきた発掘調査や石造物調査の成果から石見銀山遺跡の最盛期の広がりがほぼ推定可能であると判断されたため、わかりにくいと言われる石見銀山遺跡の景観復元を主要なテーマとした「最盛期の石見銀山の復元」を取り上げた。

また、もう一つのテーマとして、世界遺産登録時の付帯事項としてユネスコから鉱山比較研究を要請されていることもあり、石見銀山と国内外の諸鉱山との関係解明を目的とした「東アジアの鉱山比較」を取り上げることになった。第１期の研究成果については、平成22年度末に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書１』として既に刊行されている。

しかし、わずか３年間の調査研究では計画していた報告の一部や再現イラストなどが集録できなかったこともあり、「最盛期の石見銀山」を復元できたとは言えなかった。そこで、第２期の３年間も同テーマを継続することになり、平成23年度から３年間にわたり、人や物の動きから石見銀山の最盛期を描き出すことを目的に、主に港湾や街道に焦点を当てた調査研究を進めた。

平成26・27年度には成果の集約を行い、平成28年度末に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書２』として刊行されている。

平成26年度からは上記報告書の作成を行いながら、石見銀山の鉱山町を形成する大森町、銀山町の変遷と画期を明らかにするため、「石見銀山鉱山町の変遷」をテーマとした第３期の研究に着手することになった。

平成26年度は客員共同検討会１回と勉強会を５回行い、大森の町並みで寛政の大火後に普及し始める施釉赤瓦を生産した大森町菅相窯跡の測量調査も実施している。平成27年度は勉強会を３回実施し、共同検討会では２年間の研究の総括と次年度以降の成果のとりまとめ方について検討を行った。

平成28・29年度はそれぞれの分野で調査研究成果の集約に努め、平成30年度末に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書４』として刊行されることになった。

なお、「東アジアの鉱山比較」についても、調査研究を同時に進め、上記報告書１・２で公表しているが、平成25年度から３年間で実施した台湾鉱山との比較研究については『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書３』として平成28年度に刊行されている。この鉱山比較についても３年周期で終了するべき研究テーマとは言いがたく、今後も継続して調査研究を行うことに

なった。

平成29年度からは東アジアに限定せず、同時代の世界各地の鉱山について国内の研究者から情報を収集し、石見銀山との比較が可能な研究項目の抽出を行って比較研究を進めることにした。

平成29年度末に第１回の比較検討会を開催して比較研究項目の抽出を行った。これに基づいて、平成30年度からは国内外の鉱山運営体制や税・労働者をテーマとした調査研究を進めているところであり、研究成果がまとまり次第、報告する予定である。

３．「石見銀山鉱山町の変遷」の研究目的

鉱山町の変遷の研究では、石見銀山の鉱山町を構成する大森町、銀山町の成立と発展、全盛期や衰退期の様相を明らかにすることを目的として考古学、建造物、文献史料を中心とした研究を実施することにした。

考古学的には発掘調査や石造物調査が進んでいる銀山町について、昆布山谷と出土谷を中心とした集落景観の変遷に取り組んだ。建造物や文献史学では、大森町を中心にした研究を行い、建造物の種類や構成と町割り、鉱山町に関する文献史料を抽出して両町の特質等を探り出し、陣屋町及び町人の町としての機能、地役人の存在などの研究から、当時の鉱山町の景観と変遷を復元することを目指すものである。

テーマ別調査研究にかかる客員研究員は以下のとおりである。

「石見銀山鉱山町の変遷」
井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課長代理）
中野茂夫（島根大学教授）
仲野義文（石見銀山資料館館長）
藤原雄高（石見銀山資料館学芸員）
西尾克己（松江市史料編纂課）
鳥越俊行（奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長）

「東アジア鉱山比較研究」
眞鍋周三（兵庫県立大学名誉教授）
佐治奈通子（東京大学大学院）
津村眞輝子（古代オリエント博物館研究部長）
仲野義文（石見銀山資料館館長）

陶磁器からみた鉱山町の変遷

石見銀山課　新　川　　隆

1．はじめに

石見銀山遺跡は1980年代から本格的な調査が開始され、調査資料も蓄積されてきている。陶磁器についても、良好な一括資料には恵まれないものの、資料は年々増加してきている。陶磁器の分類や編年といった研究は現在までに幾つかされており、一応の陶磁器による時期区分も行われている[1]。しかしながら、こうした陶磁器を指標とした石見銀山の研究は、それぞれの地区単位で語られることはあってもマクロ的に概観した研究は少ないように思われる。また、石見銀山においては、初期段階では、採掘・製錬等を行う鉱山部分と、生活を営む居住部分が非常に近い位置にあり、職住が一体となった住居が営まれ、これらの集中する鉱山町も山内に形成されている。当然ながら山麓部分にも町屋は形成されており、これらの役割や変遷を解明することが、石見銀山全体の研究に欠かせないことは改めて言うまでもない。

本稿では、主に陶磁器を指標として、各地区の消長を捉え、鉱山町の変遷を明らかとすることを目的とする。なお、近年調査の進展した港と港町については、消長表に加え概要は述べるが、鉱山町の変遷という本稿の趣旨に沿わないため、評価や変遷については別稿で論ずることとする。

2．陶磁器による石見銀山の時期区分

石見銀山遺跡１期

肥前系陶磁器を含まず、在地の瓦質土器や土師器、貿易陶磁の青花、白磁、青磁、国産陶器の備前焼、瀬戸美濃焼で構成される時期である。各地区を概観すると、絵唐津や胎土目積みなど肥前陶磁編年Ⅰ期の肥前系陶器、Ⅱ期の砂目や溝縁皿の肥前系陶器や初期伊万里とともに青花が出土する例が多く、備前焼や瀬戸美濃焼の製品を含んでいることもある。こうした現状の出土状況では、肥前系陶磁器が含まれるか含まれないか、その区別が難しく、明確に肥前陶磁器を含まないと判断できるものだけを石見銀山遺跡１期とした。

指標とするのは矢筈城跡から出土した陶磁器、栃畑谷地区Ⅱ区下層SD02から出土した陶磁器などで、本谷地区本間歩上地点Ⅰ区下層から出土した陶磁器も該当する。また、近年出土した温泉津本町地区第４層以下（仮称）の陶磁器、古龍遺跡１トレンチ下層出土の陶磁器も該当すると考えられる。これらの地区は他の調査区と異なり、肥前陶器は確認されておらず、16世紀代の数少ない資料と考えられる。貿易陶磁器が中心で、中国製青磁をわずかに含み、白磁端反皿や青花が主体的である。この時期は今後の調査の進展により細分される可能性がある。年代では1580年以前を想定している[2]。

石見銀山遺跡２期

肥前系陶器は出土するが、肥前系磁器が出土しない段階で肥前陶磁器編年Ⅰ期に相当する。貿易陶磁器の青花は小野分類碗E群、皿E群やB2群、白磁端反皿、国産陶器では備前焼、瀬戸美濃灰釉皿、肥前系陶器の胎土目積み、絵唐津などのⅠ期の肥前系陶器が出土する。

石銀藤田地区坑口前トレンチ内や石銀藤田地区SB06、栃畑谷地区Ⅰ区の石垣周辺、安原谷地区Ⅱ区SB01、大森区域森山家下層遺物などである。肥前陶磁器編年Ⅰ期の肥前系陶器が出土する地区は多いが、Ⅱ期の肥前系陶磁器とともに出土することが多く、次の時期まで遺構が存続していると、出土状況が単純でないため判断は難しい。各地区でこの時期が存在する可能性を含んでいる。年代では1580年～1610年を想定している。

石見銀山遺跡３期

肥前陶磁器編年Ⅱ期の肥前系陶磁器を含み、Ⅲ期の肥前系陶磁器が出土しない時期で肥前陶磁器編年Ⅱ期が相当する。

肥前系陶器では砂目や溝縁皿、刷毛目や三島手などがあり、初期伊万里が出現する。

石銀藤田地区SB04・05・09、大森区域旧河島家地点下層遺物がこの段階と考えられる。石見銀山遺跡では肥前系陶器Ⅰ期の遺物がⅡ期の遺物と共に出土している場合が多く、当該期の単純な出土傾向を示す地区は少ない。年代は、1610年～1650年を想定している。

石見銀山遺跡４期

肥前陶磁器編年Ⅲ期の肥前系陶磁器が出土し、Ⅳ期の肥前系陶磁器が出土しない時期である。

肥前系陶磁器では呉器手碗などが確認される時期である。石銀藤田地区SB02や本谷地区釜屋間歩地点Ⅱ区SK01、昆布山谷地区第５地点Ⅰ区３面遺構群（SK03・04、SX28、SD05）などが該当する。年代は、1650年～1690年代を想定している。

石見銀山遺跡５期

肥前陶磁器編年Ⅳ期の肥前系陶磁器が出土し、Ⅴ期の肥前系陶磁器が出土しない時期で、肥前陶磁器編年Ⅳ期に相当する。

肥前系陶磁器では陶胎染付やコンニャク印判、外青磁などが確認できる。石銀藤田地区のSB08明褐色土層からは陶胎染付碗がまとまって出土し、この時期まで石銀藤田地区は建物が存在していることが分かる。昆布山谷地区第５地点でもコンニャク印判、外青磁碗が比較的まとまって出土している。年代は、1690年～1780年代を想定している。

石見銀山遺跡６期

肥前陶磁器編年Ⅴ期の遺物が出土し、明治期以降の陶磁器が出土しない時期で、在地系の石見焼などが出現する。

肥前系磁器では広東碗や端反碗が確認できる。龍源寺間歩地区からは広東碗や端反碗が出土している。出土谷地区Ⅱ区からも広東碗が出土しているが、前代の「くらわんか手」を含んでいる。昆布山谷地区第５地点SB02・SD03からは、広東碗や端反碗に加えて在地系の石見焼が出土しており、この時期の良好な一括資料と捉えられ、一括資料の乏しい石見銀山遺跡においては貴重な資料である。

現段階で、確実に18世紀代に遡る石見焼の出土例が確認されていないため、石見焼の有無で18世紀代と19世紀代を判別する指標になる可能性がある。年代は、1780年～1867年を想定している。

石見銀山遺跡７期

明治以降の遺物が出土する時期である。型紙摺りや銅板転写によりプリントされた遺物が栃畑谷地区Ⅱ区や出土谷地区から確認されている。大住家や渡辺家では前代の陶磁器と共に瀬戸焼、石見焼、在地系の染付などが出土している。また、「藤田組大森鉱山所」と書かれた石見焼が栃畑谷、出土谷、昆布山谷から出土している[(3)]。藤田組の操業などに関連して、この時期がより細分される可能性がある。年代は、1967（明治元）年以降を想定している。

３．各地区の概要

石見銀山では、町屋が採掘・製錬の行われた山内でも形成されていることから、鉱床が存在し、採掘の痕跡が顕著に見られる部分を鉱山部とし、生活や商業活動を主としていたと考えられる山麓部分を鉱山町部として位置づけることとした。ただし、鉱山町とした地域には、実際に鉱山町として機能した銀山町と、大森陣屋が置かれ、陣屋町として機能した大森町が存在し、厳密には性格が異なるが、ここでは山麓に展開した町屋という意味で、一括して鉱山町として扱うこととした。

第１図　石見銀山遺跡陶磁器変遷図

Ⅰ．鉱山部

（1）仙ノ山山頂東側（福石鉱床地域）

仙ノ山山頂から東側で、比較的高所に広く分布する福石鉱床を対象として、採掘が行われたと考えられる地域で、調査が行われた地区では①石銀藤田地区、②石銀千畳敷地区、③於紅ケ谷地区、④竹田地区、⑤本谷地区、⑥安原谷地区が該当する[(4)]。

①石銀藤田地区

仙ノ山山頂付近の、広大な平坦面群の一部の調査地である。側溝を有し、平坦地中央を通る道跡と、道の両側に展開する建物跡群等が検出されている。建物跡内では炉跡等が検出され、吹屋跡と推定されている。集落規模や、出土遺物内容などから、集落というより都市的性格が強いと推定されている。下層確認トレンチでは複数の遺構面を確認し、灰吹き鍋等も出土しているが、最下層までは到達していない。

出土遺物は、多くの製錬関連遺物が出土しており、陶磁器では青花（景徳鎮・漳州）、肥前陶器Ⅰ・Ⅱ期を中心に、石見銀山4期までのものが出土している。SB08など、一部では石見銀山５期の遺物も出土しているが、陶胎染付が主で、外青磁は出土していない。このため、概ね18世紀前半までに納まるのものと考えられ、18世紀後半までは存続しないものと推定される。

②石銀千畳敷地区

藤田地区同様、石銀地区の一部と考えられ、３号間歩前の平坦面での調査である。平坦面中央に南北方向に道路が通り、その両側で建物跡が検出されている。建物内では石組みの水溜遺構や炉跡等が検出されている。下層確認は行われているが、深く掘り下げての調査ではない。石銀地区に広く展開していたと考えられる鉱山町（鉱山都市）の一部と推定される。

出土遺物は石銀藤田と同様の傾向が見られるが、石見銀山４期以降の遺物はほとんど出土しておらず、17世紀後半頃に衰退したと考えられる。検出された道跡は於紅ケ谷方面に通ずる道路と推定される。

③於紅ケ谷地区

於紅ケ谷は、石銀地区の南側を北西から南東に延びる谷で、東側で本谷と合流する。調査地は石銀千畳敷地区から延びる谷との合流地点付近の平坦面である。調査はトレンチ調査から段階的に拡張されており、遺構面が２面検出され、大型の礎石建物跡や石垣等が検出されている。49号間歩前の調査区等では採掘の痕跡も確認されている。

出土遺物は、青花（景徳鎮・漳州）、肥前陶器Ⅰ・Ⅱ期、瀬戸美濃大窯４段階前半など石見銀山３期までのものが中心に出土しており、石見銀山４期のものが少量含まれる。17世紀後半には衰退していた状況がうかがわれる。

④竹田地区

仙ノ山北東側に広がる尾根上の平坦地群で、竪坑や露頭掘も存在する。Ⅰ区からⅣ区までの調査区では４面の遺構面が検出されている。炉跡、土坑、石組み遺構等が検出されているが、大型建物は未確認である。

出土遺物は、青花（景徳鎮・漳州）、肥前陶器Ⅰ・Ⅱ期、肥前磁器Ⅱ期、瀬戸美濃大窯３段階後半から４段階前半など、石見銀山３期までのものが出土しており、石見銀山４期の遺物がわずかに含まれる。

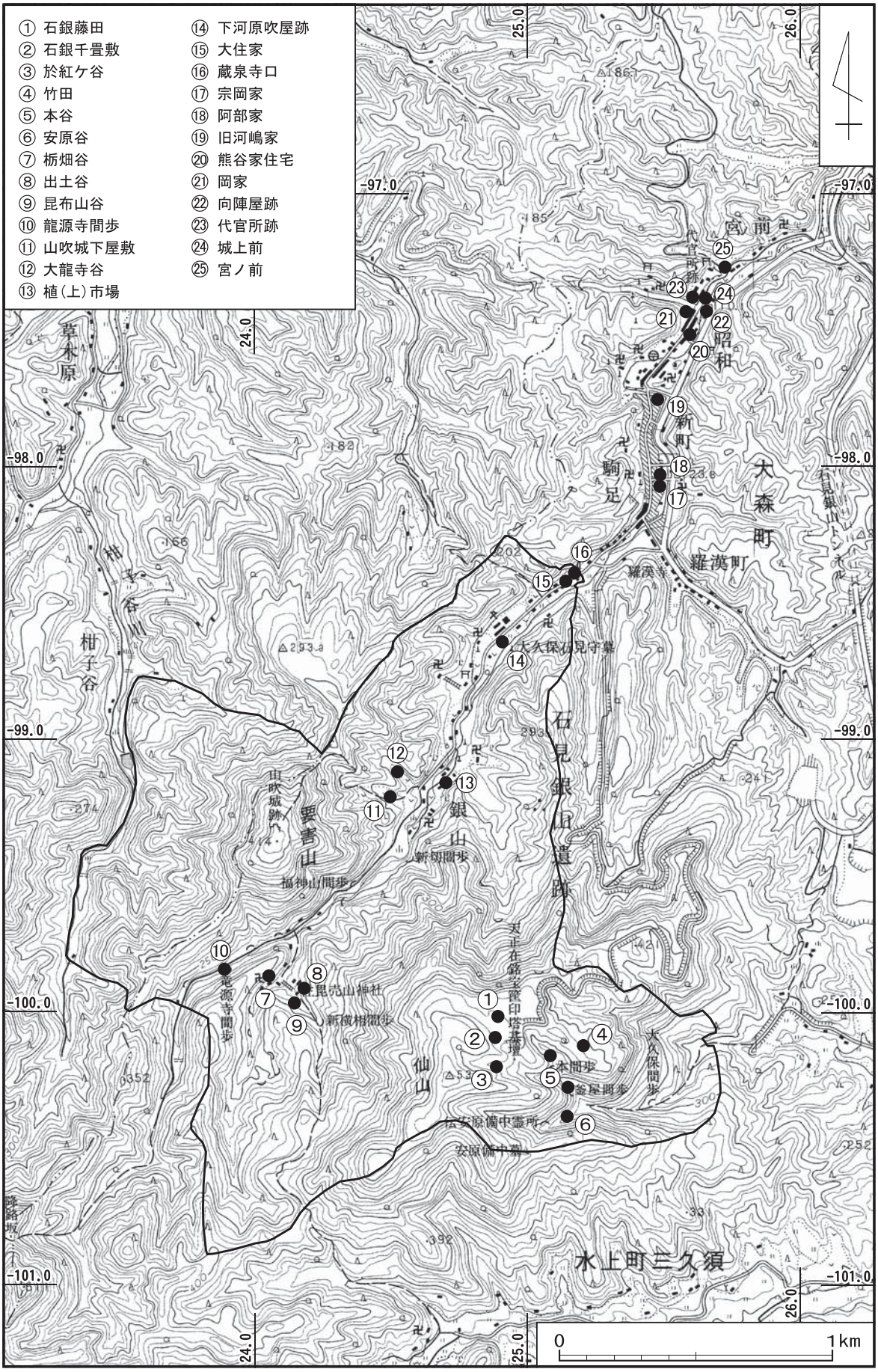
⑤本谷地区

石銀藤田地区から南東方向に延びる谷で、道の両側には多数の平坦地が存在する。

本間歩上地点は、３番露頭掘（Ｒ３）前面の平坦地に設定された調査区で、９面の遺構面が確認されており、建物跡、道跡、炉跡等が検出されている。

出土遺物は青花（景徳鎮・漳州）、青磁、白磁、肥前陶磁器Ⅰ・Ⅱ期、瀬戸美濃大窯３段階から４段階など、石見銀山３期までのものが中心に出土しており、道路遺構では石見銀山４～６期のものがわずかに含まれる。

釜屋間歩地点は、釜屋間歩周辺の調査区で、



第２図　石見銀山遺跡調査地点配置図

Ⅰ区からⅣ区までが設定されている。Ⅰ区では建物跡と伴に多くの水溜遺構が検出され、選鉱作業に特化した作業場と推定されている。Ⅱ区では礎石建物跡、炉跡、水溜遺構が検出され、選鉱から製錬まで一連の作業を行った場所と推定されている。

出土遺物は、Ⅰ区上段で貴鉛が出土したほか、陶磁器では青花（景徳鎮・漳州）、青磁、白磁、肥前陶磁器を中心に石見銀山４期までのものが出土しており、石見銀山５期の遺物が少量含まれる。また、表採資料の中には７期のものが少量含まれる。

⑥安原谷地区

仙ノ山山頂南部を東西に延びる谷で、東部で本谷と合流する。調査区はⅠ区からⅢ区までが設定されている。

Ⅰ区では１面の遺構面のみが確認され、下層の調査は行われていない。礎石建物跡、炉跡、水溜遺構などが検出されている。

出土遺物は青花（景徳鎮、漳州）、肥前陶磁器を中心に石見銀山５期までのものが出土しているが、５期のものは少量である。また、表採資料中に７期のものが含まれる。

Ⅱ区では、１面の遺構面が確認され、礎石建物跡、石組みの溝跡、水溜遺構、石列などが検出されている。

出土遺物は、青花（景徳鎮・漳州）、肥前陶磁器を中心に石見銀山４期までのものが出土しているが、石見銀山２期までのものが圧倒的に多い。また、Ⅰ区同様表採資料中に石見銀山７期のものが含まれる。

Ⅲ区では３面の遺構面が確認され、石垣などが検出されている。出土遺物は青花（景徳鎮・漳州）、肥前陶磁器を中心に石見銀山４期までのものが出土し、Ⅱ区と同様の出土傾向を示している。

（２）仙ノ山西側（永久鉱床地域）

永久鉱床を対象として採掘が行われたと考えられる地域で、調査が行われた地区では⑦栃畑谷地区、⑧出土谷地区、⑨昆布山谷地区、⑩龍源寺間歩地区が該当する。

⑦栃畑谷地区

仙ノ山西麓を流れる山神川沿いに南西から北東に延びる谷で、北側で大谷と合流する。調査はⅠ区とⅡ区とで行われている。Ⅰ区では直径90㎝の炉跡が検出されており、Ⅱ区では３面の遺構面が確認され、礎石建物跡、製錬関連遺構、土坑、溝跡等が検出されている。

出土遺物は、Ⅱ区の下層確認トレンチで16世紀後半以前と考えられる青磁、白磁、青花、褐釉壺などが出土している。その他では、石見銀山３期までの肥前陶磁器が出土しており、石見銀山４期と石見銀山５期前半の遺物については確認されていない。また、石見銀山５期後半から石見銀山７期のものまでが出土している。

⑧出土谷地区

仙ノ山西麓に位置し、佐毘売山神社北側を南東から北西に延びる谷で、北西側で栃畑谷と合流する。調査区は平坦面ごとにⅠ～Ⅲ区までが設定されている。Ⅰ区では、建物の土間面と製錬関連遺構が検出され、Ⅱ区では、礎石建物跡、製錬関連遺構の他、石垣、水路、岩盤加工遺構などが検出されている。

出土遺物は、石見銀山３期までの青花、肥前陶器及び、石見銀山５期後半以降の肥前陶磁器、瀬戸焼、在地系染付、石見焼等、近代のものまで出土している。

⑨昆布山谷地区

仙ノ山西麓で出土谷とは佐毘売山神社を隔ててすぐ南側に当たり、概ね南東から北西方向に延びる谷である。調査区は各平坦面を中心に第１地点から第８地点までが設定されている。

第１地点は、佐毘売山神社南側の平坦面に設定された調査区で、礎石建物、炉跡等が検出されている。下層確認が十分に行えていないため、石見銀山５期以前の遺物がほとんど出土しておらず、石見銀山２期と石見銀山４期の遺物がわずかに出土している他は、ほとんどが石見銀山５期後半以降の遺物である。

第２地点は、第１地点の南側で谷の中では北側に位置する平坦地に設定された調査区である。礎石建物、炉跡、溝跡、土坑等が検出されており、北側の礎石建物は明治期の選鉱場跡と推定されている。出土遺物は第１地点同様下層確認が不十分なため、石見銀山５期以降の陶磁器が主体で、石見銀山２・３期の青花、肥前陶器等が出土している。石見銀山４期の遺物は少量確認されているのみである。

第３地点は、谷の奥で谷幅が急激に狭くなる位置に当たり、谷の東側の平坦面に設定された調査区である。幅約２ｍのトレンチ調査で、礎石建物跡、被熱した石組遺構、岩盤加工遺構等が検出されている。調査範囲が狭いため、出土遺物の総数はわずかであるが、礎石建物に伴うと考えられる石見銀山６期以降の肥前磁器と、岩盤加工に伴うと考えられる石見銀山３期までの青花などが出土している。

第４地点は、谷の中央付近に当たり、村上坑の道を挟んだ向かい側の平坦地に設定された調査区である。カマドを有する礎石建物跡、土坑、石垣、溝跡、道路遺構等が検出されており、下層確認トレンチでは石垣や岩盤加工遺構等が検出されている。出土遺物は、建物跡に伴うと考えられる石見銀山６期以降の陶磁器が主体をなすが、下層確認トレンチからの出土遺物は石見銀山５期までの陶磁器も満遍なく含まれる。この下層確認トレンチでは岩盤加工遺構及び、石垣を伴う遺構面を確認しており、それぞれ17世紀初頭と17～18世紀代と推定されている。

第５地点は、第２地点の南側に隣接する平坦面に設定された調査区である。５面以上の遺構面が確認されており、礎石建物跡、溝跡、炉跡、水溜遺構、岩盤加工遺構等が検出されている。他にユリカス集積遺構、ズリ堆積層等も確認されている。出土遺物は、Ⅱ区上面SB02で石見銀山６期のまとまった陶磁器が出土したほか、各層において青花、肥前陶磁器、石見焼など石見銀山１～７期までの遺物が出土している。遺物の半数以上は６期以降のものであるが、他の時期の遺物も一定数以上出土しており、遺物にほとんど断絶が見られない。

第６地点は、第４地点と第５地点の中間で、谷がやや狭まり西側に岩盤が露出している位置にあたる。調査は、岩盤加工遺構の顕在化とトレンチ調査が行われ、岩盤加工遺構及び岩盤を加工した道路遺構が検出されている。出土遺物は石見銀山２・３期の青花、肥前陶器と石見銀山６期の肥前磁器などがわずかに出土しているのみである。

第７地点は、第６地点の南側に設定された調査区で、岩盤加工遺構の顕在化が行われ、岩盤を掘り込んだ溝や階段状遺構が確認されている。遺物は石見銀山２・３期の肥前陶器や石見銀山７期の肥前磁器がわずかに出土しているのみである。

第８地点は、第５地点と第６地点にはさまれた平坦面に設定された調査区である。道部分を中心にトレンチ調査が行われ、石垣、道遺構、礎石等が検出されている。出土遺物は、石見銀山５期以降の肥前陶磁器を中心に石見銀山７期までのものが少量出土している。

⑩龍源寺間歩地区（大谷地区）

銀山区域南西の大谷地区に位置する龍源寺間歩前に設定された調査区である。調査区は、Ⅰ区とⅡ区に分けて調査が行われ、３面の遺構面が確認されている。検出遺構は、礎石建物跡、炉跡、岩盤加工遺構等がある。

出土遺物は、石見銀山５期以降の肥前陶磁器が中心であるが、石見銀山３期までの青花（景徳鎮・漳州）、肥前陶器も出土しており、石見銀山４期の肥前磁器も少量含まれる。

Ⅱ.鉱山町

（１）銀山区域(銀山町)

銀山町は江戸期においては、銀山柵内の区域を指しており、蔵泉寺口より上手側の町並みが相当する。また、大森銀山伝統的建物跡群保存地区の選定にあたっては、旧銀山町を銀山区域、大森町を大森区域としている。

⑪山吹城下屋敷地区

山吹城の大手部分に当り、広く「下屋敷」の地名が残る地区である。調査区は休役所推定地付近に6本のトレンチが設定されている。検出された遺構には礎石、炉跡、石列などがある。

出土遺物は、石見銀山3期までの青花・肥前陶器が出土しているが、他の時期のものはほとんど確認されていない。

⑫大龍寺谷地区

山吹城大手の東側で南北に通る谷で、調査区は、2区約50㎡が調査されている。調査の結果、整地面、柱穴、整地面に埋めこまれたかなめ石などが検出されている。

出土遺物は石見銀山3期までの青花、肥前陶器などが中心であるが、石見銀山6期までの肥前陶磁器なども少量出土している。

⑬植（上）市場地区（休谷）

山吹城大手の南東側にあたり、「上市場」の地名が残る地区である。調査区は、旧安田家地点と旧杉谷家地点に設定されている。調査では3面の遺構面が検出されており、礎石、井戸、石垣、排水溝などが検出されている。

出土遺物は、石見銀山1期から石見銀山7期の陶磁器が出土しているが、石見銀山1～3期の肥前陶磁器や石見銀山6・7期の肥前陶磁器、石見焼などが多く、石見銀山5期のものが最も少ない。

⑭下河原吹屋跡地点

銀山区域の中で、大久保長安の墓所のある大安寺参道南側に位置する調査地区で、約480㎡が調査されている。調査の結果、間口6間の礎石建物と間口2間の建物が検出されている。間口6間の建物は、内部から炉跡、作業台、排水溝、かなめ石などが検出されたことに加え、鉱滓の分析結果などから銀製錬を行った「吹屋跡」と結論付けられている。

出土遺物は、石見銀山3期までの青花、肥前陶磁器を中心に出土しており、石見銀山4期以降の陶磁器も少量であるが出土している。

⑮大住家地点

大住家は銀山区域の中でも最も下流に位置する屋敷地で、建物建築に伴って事前調査が行われた調査区である。調査の結果、礎石建物が検出され、それに伴う土間面、埋甕遺構なども検出されている。

出土遺物は石見銀山5期以降の肥前陶磁器、瀬戸焼、石見焼などが多く出土している。また、下層確認トレンチからは石見銀山2期の肥前陶器も出土している。

⑯蔵泉寺口番所跡地点

石見銀山は、鉱山部分を囲う柵列が巡らされていたが、この柵列が町並みを横切り、番所が設けられていたと推定されている辺りを蔵泉寺口番所跡地点としている。調査は3年間実施され、番所跡推定地付近の2段の水田面に調査区が設定されている。銀山町側の1段高い調査区では3面の整地面と石列が、大森町側の一段低くなった地区では石列などが検出されている。

出土遺物は、搬入されたズリ層から石見銀山3期までの青花、肥前陶器等がまとまって出土しており、石見銀山5期以降の肥前陶磁器等も少量見られる。

（2）大森区域（大森町）

旧大森町は江戸期には陣屋町として発展した経緯があり、蔵泉寺口から下手の町並みが相当する。町並みはさらに上手側から「羅漢町」「駒の足」「新町」「昭和区」「宮の前」「下佐摩」の各地区に分けられる。

⑰宗岡家地点

大森区域の中でも上手に位置する駒の足地区にある武家屋敷である。前庭、中庭、建物内にそれぞれ調査区が設定されている。調査の結果、下層確認トレンチでは、6面の遺構面が確認されている。また、現存建物以前の礎石建物や石垣等も検出されている。

出土遺物は、各時期の陶磁器が出土しているが、石見銀山4期・5期のものが少ない。

⑱阿部家地点

宗岡家とは小路を隔てて北側に隣接する武家屋敷である。前庭、中庭を中心に調査が行われ、礎石建物跡、石列などが検出されている。

出土遺物は、深掘り部から石見銀山２期・３期の肥前陶器が出土しているが、上層から出土した石見銀山６期以降の肥前磁器がほとんどである。

⑲旧河島家地点

旧河島家は、町並みの中ほどの新町地区で、通りに面した東側に位置する武家屋敷である。解体修理に伴い計約100㎡の調査が行われた。南に隣接する空き地では、上層と下層の２面の遺構面が検出され、上面で石列、石組みの側溝、便所が検出されている。下層では井戸跡、石組みの炉状遺構、石列、石組みの柱穴状遺構などが検出されている。

出土遺物は、下層から石見銀山３期までの青花、肥前陶器、備前焼、志野等が出土しており、石見銀山４期の陶磁器も少量含まれる。上層からは石見銀山６期以降の肥前磁器や石見焼等が出土している。

⑳熊谷家住宅地点

大森区域の中でも北側にあたる宮の前地区に所在する商家である。解体修理に伴い建物内、中庭、裏庭の調査が行われた。調査の結果、礎石建物、地下蔵、水禽沓、水路などが検出されている。

出土遺物の大半は、石見銀山６期以降の肥前陶磁器が中心であるが、深掘り部分からは石見銀山２期・３期の肥前陶器等が出土している。

㉑岡家地点

岡家は代官所跡から道を挟んだ南側に位置する武家屋敷で、解体修理に伴って中庭、建物内の調査が行われた。調査の結果、下層で柱穴等が検出されている。

出土遺物は、青花、肥前陶磁器など石見銀山３期までのものと、石見銀山６期以降の肥前陶磁器、石見焼等が出土している。

㉒向陣屋地点

向陣屋跡は、代官所跡から銀山川を隔てて対岸の南東側に位置する。調査区は1.5×3.5ｍのトレンチが２本で、調査面積が狭く、明治期以降の攪乱も受けているため、明確な遺構面は確認されていないが、下層で、近世の遺物包含層が確認されている。また、未報告であるが、向陣屋東側の県道で水道工事中に石製の井戸枠と埋桶遺構が発見されている。調査面積が狭いため出土遺物も少ないが、17世紀代の軒平瓦のほか、各時期の陶磁器がわずかに出土している。

㉓代官所跡地点

代官所跡の南側に隣接する地点で、古図などにより代官の私邸、米蔵跡などの推定地とされる地点である。調査の結果、遺構面上では２基の石列が検出されており、切石によるものと、自然石によるものがある。いずれも代官所跡の長屋門とほぼ平行に検出されている。

出土遺物は石見銀山３期までの肥前陶器の他、各時期の肥前陶磁器が少量出土している。

㉔城上前地点

城上神社南側道路面に設定された調査区である。４面の遺構面が検出され、上層では建物基礎、下層では多くの遺物と共に地割を示す石列や水路などが検出されている。

出土陶磁器は、石見銀山３期までの青花、肥前陶器を中心に各時期の陶磁器が出土しているが、石見銀山４期・５期のものは少ない。

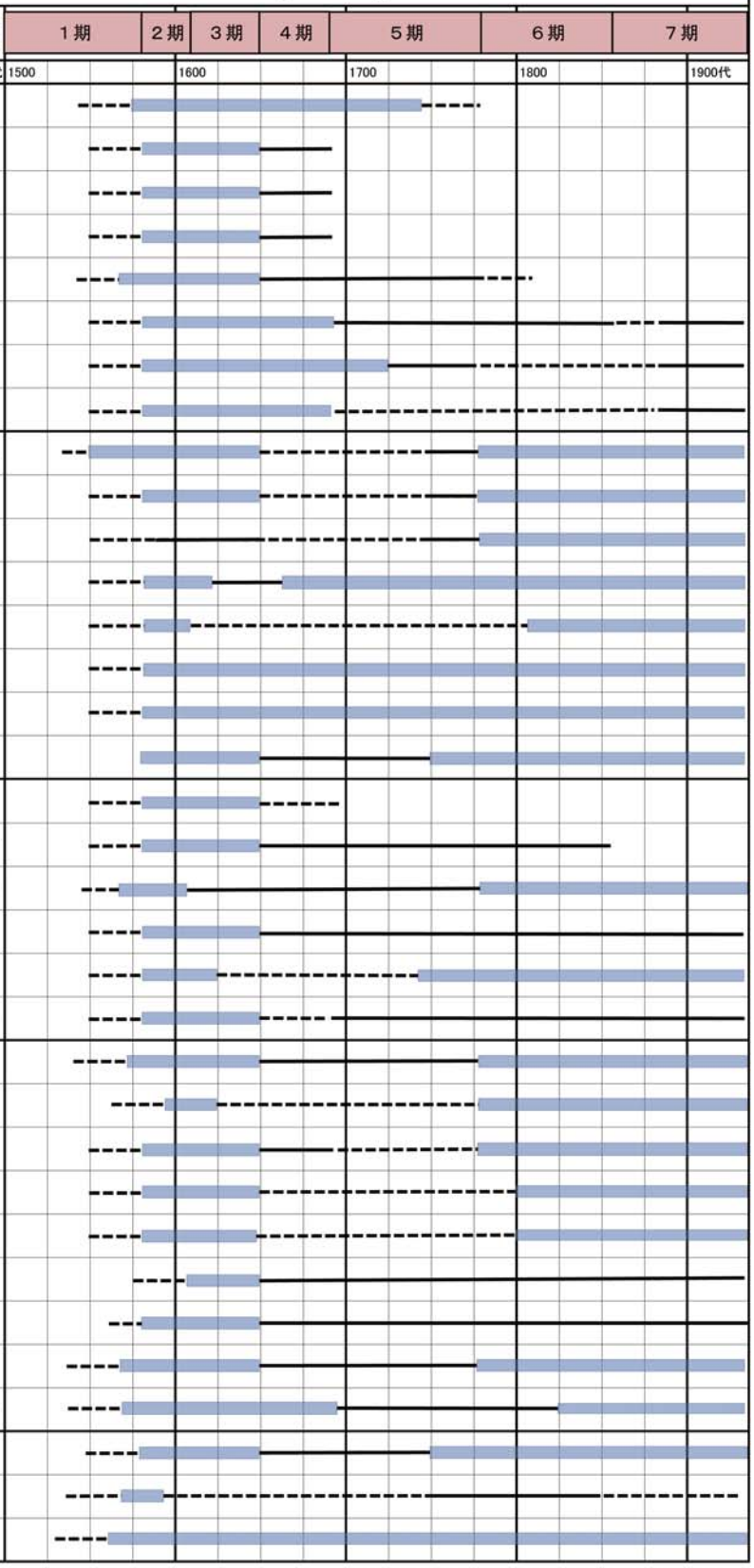
㉕宮ノ前地点

大森町の北端に位置し、銀山川の北側の地域を宮ノ前地区としている。県道建設に伴い調査が実施されたことに始まるが、その後トレンチ調査も実施されている。県道の調査区は、１区から８区まで設定して調査が行われ、建物跡４棟と製錬関連遺構含む多数の遺構が検出されている。中でも「４区製錬工房」と称される建物は、建物内部に20基もの炉跡が検出されてお

第１表　石見銀山遺跡各地区消長表

2018年度版(暫定)

区分	区域	地区・地点	須恵器	1400代
鉱山	仙ノ山山頂東側（福石鉱床）	石銀藤田	○	
		石銀千畳敷		
		於紅ケ谷	○	
		竹田	○	
		本谷(本間歩上)		
		本谷(釜屋)		
		安原谷(Ⅰ区)		
		安原谷(Ⅱ・Ⅲ区)		
	仙ノ山西側（永久鉱床）	栃畑谷		○
		出土谷		
		昆布山谷(1地点)		
		昆布山谷(2地点)		
		昆布山谷(3地点)		
		昆布山谷(4地点)		
		昆布山谷(5地点)		
		龍源寺間歩		
鉱山町（陣屋町）	銀山区域（銀山町）	山吹城下屋敷		
		大龍寺谷		○
		植(上)市場		○
		下河原吹屋跡		
		大住家		
		蔵泉寺口		○
	大森区域（大森町）	宗岡家		
		阿部家		
		旧河島家		
		熊谷家住宅		
		岡家		
		向陣屋		
		代官所跡		
		城上前		
		宮ノ前	○	○
港と港町	港町	鞆ヶ浦		
		古龍		
		温泉津		



※ ▬ は主な存続期間　━━ は少数ながら遺物等が確認できる期間　- - - - - は現段階でほとんど遺物が確認できない期間

り、16世紀末から江戸初期頃の品位を調整する精錬施設と推定されている。

出土遺物は、石見銀山１期から石見銀山７期までのものが出土しているが、石見銀山５期の出土量は少ない。中でも石見銀山３期までの遺物は青花、瀬戸美濃、肥前陶器など質、量共に卓越している。

Ⅲ．港と港町

（１）港町

㉖鞆ヶ浦（松浦家地点）

鞆ヶ浦の町並み中央付近に所在する旧松浦家を、サテライト施設として整備するにあたり、その事前調査が実施された地点である。トレンチ調査のため、調査面積は僅かであるが、３面の遺構面が確認され、現存建物に伴うタタキ面の他、柱穴、岩盤加工遺構等が検出されている。

出土遺物は、石見銀山２期の肥前陶器をはじめ各時期のものが含まれるが、石見銀山４期・５期のものは少量である。

㉗古龍遺跡

遺跡内の平坦地のうち、２ヶ所でトレンチ調査が行われている。このうち、１Ｔでは石列、柱穴等が検出されている。

出土遺物は、石見銀山１期と考えられる白磁、青花（景徳鎮・漳州）、瀬戸美濃、朝鮮王朝陶器などがまとまって出土しているほか、２Ｔでは石見銀山５期以降の肥前磁器が一定量出土している。

㉘温泉津遺跡（本町・寺町・中町地区）

温泉津遺跡では、環境整備に伴う事前調査が実施されている。本町・寺町・中町地区においては現道路部分の下層から前身の道路遺構、石組水路、港湾関連遺構などが検出されている。

出土遺物は、石見銀山１期から石見銀山７期までの遺物が出土しているが、中でも下層からは石見銀山１期から石見銀山３期までの青花、肥前陶器、瀬戸美濃、備前焼、朝鮮王朝陶器等が大量に出土している。特に、第４層以下では肥前陶器を含まない層が確認されており、16世紀第４四半期と推定される陶磁器がまとまって出土している。石見銀山では数少ない石見銀山１期の良好な資料と言える。

４．鉱山町の変遷について

各地区を概観してみると、ほとんどの場所において石見銀山２期から石見銀山３期の遺物が出土しており、銀山最盛期の時期（16世紀末～17世紀初期）と一致する。この期間はいたるところで居住区域や生産区域が拡大され、山内でも非常に多くの人々が活動していたことがうかがえる。

Ⅰ．山内の町屋の形成と変遷（鉱山部）

山内の各区域を見ると、仙ノ山山頂東側とした区域は、石見銀山５期を境に遺物がほとんど出土しなくなる。本谷・安原谷地区では、谷の規模に比べ調査区が限定的であったこともあってか、陶磁器の出土は僅かである。石銀藤田地区でも陶胎染付がまとまって出土しているSB08でも外青磁は出土していないので、18世紀後半までは存続していないものと考えられる。区域全体で見ると、概ね18世紀までで拠点的な鉱山町としての機能は終えているものと考えられ、一部の地域で細々と存続している状態であったと考えられる。銀の生産量の減少に伴って、鉱山町も衰退したものと推定されている。本谷上地点については、一部道として存続している可能性が高く、敷地として積極的に使用されていた痕跡は確認されていない。本谷釜屋間歩地点においても、石見銀山５期以降の遺物は僅かに出土しているが、遺構も確認されておらず、周辺からの流入、もしくは通いで作業していた者により持ち込まれた可能性が高い。本谷、安原谷については表土や表採資料中に明治期の陶磁器が含まれており、明治期の藤田組による再開発を反映したものと推定される。

仙ノ山西側とした区域は、概ね石見銀山３期までいったん衰退する地区と期間を通じて存続する場所が見られる。栃畑谷、出土谷は石見

銀山３期以降極端に遺物の量が減少し、くらわんか手が現れる18世紀後半頃から再び増大する。昆布山谷は石見銀山３期に減少する地域（第３地点）と期間を通じて存続している場所（第５地点）がある。減少する場所でも18世紀後半頃から遺物が増え、石見銀山６期には再び遺物量が増大する。この18世紀後半に遺物が増大する背景には銅製錬の本格化があるとされており、産銀量の減少によりいったん衰退した町が再び活況を呈したものと解釈されている。

一方、栃畑谷Ⅱ区の下層SD02からは肥前陶器が出土せず龍泉窯系の青磁や白磁、青花などが出土しており、16世紀中頃〜後半の陶磁器と推定されることから、石見銀山１期段階の遺構と考えられている。これらの陶磁器は、銀山柵内で出土したものでは最も古い様相を示しており、銀山開発が戦国期まで遡る資料となっている。しかし、文献史料では、銀山開発時期が大永７（1527）年とされており[5]、現段階では、考古学的に16世紀第２四半期まで遡れる資料は確認されていない。

Ⅱ．山麓の町屋の形成と変遷（鉱山町部）

山麓の鉱山町をみると、銀山町一帯でも石見銀山２期・３期の陶磁器は一様に出土しており、この時期にはすでに広範囲に町屋が展開していた状況がうかがえる。仙ノ山西側区域同様石見銀山４期から５期にかけて衰退期が見られるが、植（上）市場地区など一定量の遺物が出土する場所があり、継続して遺物の出土する地区（下河原）があるなど町屋として存続していた様子もみてとれる。ただ、一定量以上の調査面積を確保して調査した地区が少なく、区域全体の様相解明には不十分な感が否めない。

植（上）市場では戦国期に遡る可能性のある遺物と遺構面を検出しているが、現地表面下1.8ｍの深度で、上層に厚い堆積が見られることから、地中深くに戦国期の町屋が展開していた可能性がある。大龍寺谷、植(上)市場で龍泉窯系の青磁が出土していることも、この付近の開発がより古い時期まで遡る可能性を示唆しているかもしれない。

大森町での調査も小規模なトレンチ調査が多く、十分な様相解明には至っていないが、多くの地点での調査を行っている。石見銀山２期・３期には図示した地点のほとんどで遺物、遺構が確認されており、この時期には地区を通して町並みが形成されていたことがわかる。文献史料でも、慶長７（1602）年に、初代奉行の大久保長安により、大森町普請の指示が出されており、指示通りに普請が実行されたとすれば、調査成果とも一致する。一方、城上前地点、宮ノ前地点では石見銀山１期まで遡る可能性のある遺構や遺物が確認されており、城上神社周辺は周囲より早くから町並みが形成されていたことがうかがえる。同様に宗岡家地点や杉谷家地点も石見銀山１期に遡る可能性があり、駒の足周辺でも周囲より早くから町並みが形成されていたと考えられる。江戸初期には町全体に町屋が展開していることから、町の南北にすでに存在していた町屋ををつなぐように新たに町並が形成されたものと推定される。

遺構や遺物が確認される調査区は概ね町を貫通する道沿いの調査区が多く、敷地の後背地にあたる部分では確認されないことが多い。このことは道沿いに町屋が建てられていたことを示し、現在の町並みに土地利用の形態が継続されていることも明らかとなった。さらに、調査区の中には寛政12（1800）年の大火の痕跡と考えられる焼土面や焼土層が確認できる場所があり[6]、年代考察の鍵層となっている。この焼土層の下層からは現在まで釉薬瓦は出土しておらず、大火後に釉薬瓦の使用が始まったものと考えられ、現在の赤瓦を含む風景は1800年以降に形成されたものと考えられる。同様に焼土層の下層からは石見焼の出土も確認されておらず、石見焼の使用も釉薬瓦とほぼ同時期の1800年以降に始まったものと推定される。

Ⅲ．昆布山谷地区の遺構と遺物

前項までで、銀山全体の大まかな変遷を述べてきたが、より小範囲な地区の変遷について昆布山谷を中心に見てみたい。昆布山谷地点は昨年度で８年間に及ぶ調査を終了しており、谷の

上流から下流の平坦面までかなり広範囲に渡って調査が行われている。また、谷全体の分布調査も行われ、各平坦面で採集された遺物の資料も蓄積されている。こうしたことから、谷全体の変遷を探るには他の谷に比べ条件が揃っている。谷全体を通して石見銀山６期以降の遺構や遺物が確認されており、18世紀後半以降に町並みが形成されていたことがうかがえる。一方、石見銀山２期・３期については深掘りを十分に行っていない１地点は少量であるが、全体的に出土しており、この時期に盛んに開発が行われたことがうかがえる。

調査した中で最も高所に位置する第３地点を見てみると、下層で確認した岩盤加工遺構直上で青花が出土しており、この時期に岩盤加工を伴う開発行為が行われたと考えられる。その後、永い空白期を経て幕末から明治期に礎石建物が建てられている。

第４地点をみると、上面で検出した礎石建物や石垣は18世紀後半以降と考えられ、下層確認トレンチでは硬化面と最下層で岩盤加工遺構を検出している。硬化面付近では呉器手碗など石見銀山４期の陶磁器が出土しており、概報では18世紀前半としているが、17世紀後半の面と考えられる。硬化面下層からは青花、石見銀山３期頃の肥前磁器が出土しており、岩盤加工遺構は石見銀山２期・３期頃の遺構の可能性が高い。また、こうした成果から第４地点は17世紀初頭から前半にかけて岩盤を加工して開発を行った時期があり、17世紀後半に盛土整地により敷地を造成する。その後、やや遺物の少ない18世紀前半を経て18世紀後半以降石垣を再構築して、敷地を造成し、その上に上層の建物が建てられたと推定できる。この上層建物内では生産に関連する遺構が検出されていないことから、主に居住のための建物であったと考えられる。

第５地点は、昆布山谷の調査区では最も広く調査を行った地点で、複数の遺構面を確認している。第１面では18世紀末頃から19世紀の礎石建物を検出している。また、明治期の藤田組鍛冶場と推定される礎石建物も検出している。Ⅰ区の下層確認トレンチでは、ズリ・ユリカスの堆積層の下より17世紀後半頃の水溜遺構、炉跡などを検出している。最下層には岩盤加工遺構があり、石見銀山２期・３期の陶磁器が出土している。これらの成果から、17世紀初頭から前半にかけて岩盤を大規模に加工して開発を行い、やや嵩上げ整地して水溜や炉跡を使った生産活動を行い、廃絶後はユリカス、ズリの廃棄場となる。18世紀末から19世紀初め頃に、石垣を構築してズリ山を埋めて２段の敷地に造成し、上下に礎石建物を建てたと推定できる。その後、明治21年頃に藤田組により鍛冶場が建築されたと思われる[7]。

第２地点では、礎石建物を２棟検出している。１棟は石見銀山６期段階の建物と考えられ、炉跡を伴う。１棟は、明治期の藤田組の選鉱場と考えられる建物である[8]。しかし、下層確認が十分に行えておらず、遺構面を検出した以外は下層の状況は明らかにできない。ただ、石見銀山２期・３期の青花、肥前陶器が出土していることから、この頃から開発が開始された可能性が高い。

第１地点では、建物跡と炉跡を検出しているが、検出面が異なり、同時期の遺構ではない。炉跡は上面で検出しており、幕末の遺構と考えられる。下層で検出した建物跡は部分的であるが、18世紀後半以降の建物と推定できる。下層確認が不十分で下層の状況は不明であるが、包含層から青花と肥前陶器などが出土しており、石見銀山２期・３期には開発が開始されていた可能性がある。

このほか、第５地点・第８地点では石垣と道路遺構を検出しており、上層の道路遺構からは釉薬瓦などが出土しており、明治期の遺構と推定している。石垣に伴う道路面は２～３面確認しており、下面の道路直上から石見銀山５期後半の肥前磁器(外青磁)が出土しており、この時期に石垣及び道路が構築された可能性がある。上面の道路面には石垣上から転落したと考えられる木舞と壁土の一部が出土している。

こうした調査成果を整理して昆布山谷全体の変遷をみると、16世紀終わり～17世紀初頭には

開発が始まったと考えられ、江戸の初期には大規模な岩盤加工を伴う本格的な開発が行われたと推定される。最盛期を過ぎた17世紀後半には谷の奥側は衰退し、概ね現在の村上坑付近以下が主な活動域となったと考えられ、新横相間歩のほぼ向かい側に当たる第５地点では、大規模な水溜遺構や炉跡が作られ、選鉱、製錬といった生産活動が行われている。生産活動が終わった18世紀にはユリカスやズリの廃棄場となる。18世紀末から19世紀初め頃にかけては石垣の構築を伴う大規模な造成が行われ、区割りの変更が行われている。区割り変更後に建てられた建物には土壁を有する建物も見られ、第４地点には生産施設を伴わない居住専用の建物も建てられている。第５地点の建物は規模も大きく、遺物も多く出土していることから一般の居住用建物ではない可能性もある。この建物は新しいタイプの端反碗が出土していることから幕末頃まで存続したと考えられる。明治期になると明治19年から銀山経営に着手した藤田組の関連施設が建設されている。

５．今後の課題

ここまで、石見銀山遺跡出土の陶磁器を中心に遺跡の変遷について検討を行ってきた。しかしながら、指標となる陶磁器について、現段階で解決できていない問題も多く残っている。ここでは、そうした問題点を改めて整理、提起することによって、今後の研究の一助としたい。

Ⅰ．石見銀山２期の評価について

石見銀山２期は、肥前陶器Ⅰ期を基準に設定されているが、年代幅は1580年～1610年である。石見銀山ではほとんど出土していない岸岳系肥前陶器を除けば、1590年～1610年の年代範囲なる。この年代内には江戸幕府の成立が含まれており、この間に大きな支配体制の変化が起きており、1600年を境にその前と後では遺構の評価に大きな違いが生じる。

生産地の年代観では1590年～1610年と評価される肥前陶器について、石見銀山遺跡では、江戸幕府成立以前にははほとんど搬入されていない可能性を含めて、厳密な資料評価を行う必要がある。一方、肥前陶器同様広域流通した焼き物に瀬戸美濃焼があり、石見銀山遺跡からも一定量が出土している。内容を見ると大窯４段階の前半・後半が最も多く、年代では1590年～1610年と肥前陶器とほぼ同様の年代観を示す。竹田地区と本間歩上地点では大窯３段階の後半が多く、やや古くなる傾向を示すが、全体としては1590年～1610年に大きなまとまりを持つ。さらに、瀬戸・美濃焼きは出土する地区にやや偏りがみられ、出土する地区の性格、年代などを検討する資料になりうる可能性がある。

現段階で、1600年の前後を画する確実な遺物は確認されておらず、今後、より詳細な資料検討を行い、一定の判断基準を確立する必要がある。

Ⅱ．石見銀山遺跡の画期について

前項で述べているように、石見銀山遺跡については、独自の画期が存在することは、これまでも言われていることである。政治的には支配体制の変化する江戸幕府の成立、明治維新や、奉行制から代官制への移行など、鉱山史では生産量の変化、銅生産の動向などが挙げられ、物理的には、天文11（1542）年の水害、寛政12（1800）年の大森大火などの災害による変化などが挙げられる。こうした変化は、石見銀山全体に及ぶものから、局地的なものもあり、これらを石見銀山全体の中でどのように位置づけていくのかを検討する必要がある。

もとより、考古学の分野だけでは解決する問題ではなく、文献史学などさまざまな分野からの検証が必要で、それらをすり合わせて、石見銀山全体の画期を設定することが求められる。陶磁器の編年作業も、この画期に沿って、作成されるべきで、その編年が完成することによって、はじめて石見銀山遺跡の陶磁器編年が確立されることになる。

Ⅲ．石見焼の名称及び年代観について

石見銀山遺跡を含む石見地方では、19世紀以

降在地系陶器である石見焼の生産が盛んとなり、それに伴って遺跡からも石見焼が出土するようになる。石見銀山遺跡においても19世紀代の陶磁器に伴って石見焼が出土している。肥前陶磁器では、端反り碗や広東碗に伴う例が多く、近代になると出土量は飛躍的に多くなる。

この石見焼については、近世段階では、各窯業地の名を冠し、温泉津焼、江津焼、外ノ浦焼など、在地色の強い焼き物として流通していた経緯を踏まえ、石見銀山遺跡での取り扱いは、近代に「石見焼」という名称が定着する以前の製品については「石見系」という名称を使用してきた。こうした中、平成25〜27年度に島根県古代文化センターによって、テーマ研究事業「近世・近代の石見焼の研究」が実施され、報告書が平成28年度末に刊行された。この中で、石見焼の定義として、「近世以降に石見国内で焼かれた日用陶器」と定義され、石見系については、石見の職人の出稼ぎや移住によって石見国外で石見の技術によって生産を開始した産地の製品、と位置づけられた。

この見解は、従来の石見銀山遺跡での見解とは異なるが、今後、県内外の研究機関、自治体がこの定義を採用することが想定されることから、石見銀山遺跡においても、この定義に従った呼称を採用することとした。したがって、既刊の報告書で石見系とした製品については、順次名称変更作業を行うこととした。

一方で、石見焼の編年については、十分な生産地資料及び消費地資料が得られていないことから、体系的な編年案は示されていない。このため、出土した石見焼の年代観については、共伴資料によるところが大きい。

文献史料では18世紀代から窯業が開始されたとする記載が散見されるものの、発掘調査ででは確実に18世紀代に遡れる資料は確認されていない。石見銀山では寛政12（1800）年に大森大火が発生しており、発掘調査ではこの時の焼土層が検出されることがあり、鍵層となっている。この焼土層の下層で石見焼が出土すれば18世紀代の製品と推定されることから、今後の調査成果に期待が高まっている。

また、明治20年頃作成されたと考えられる製品に「藤田組大森鉱山所」と銘の入った一群がある。これは、明治19年から石見銀山の鉱山経営を行った大阪の藤田組が発注したと考えられるもので、制作年代が限定できる資料となっている。銀山領内など、付近の窯跡資料との比較検討を行えば、藤田組発注製品の供給窯が判明する可能性がある[9]。

このように、石見焼については、まだ、研究段階で、今後、調査研究が進展すれば、編年案等、新たな見解が示されることが期待される。

Ⅳ．16世紀段階の遺物の評価について

16世紀段階の遺物については、確実な資料が少なく、肥前陶磁器の出現する前の段階をまとめて石見銀山１期としている。貿易陶磁器では、青磁、白磁、青花でそれぞれ編年案が示されており、石見銀山遺跡出土遺物に援用することは可能であるが、栃畑谷Ⅱ区下層SD02のようにやや時代の異なる青磁、白磁、青花が同一遺構から出土するなど、単純に編年が行えないのが現状である。また、現在までのところ、16世紀前半から中頃まで遡れる資料が極めて少なく、検討を一層難しくしている。

石見銀山遺跡は、総合調査が開始されてから20年以上に渡って継続的に調査を実施してきたが、上層の遺構に阻まれ、確実に最下層まで掘り下げた例は無い。これについては、上層の遺構を避けての小範囲調査では、深度が２ｍを超えると物理的に調査の限界に達することも一因となっている。

しかしながら、より古い時期の存在をうかがわせる青磁や白磁といった遺物は、包含層からもほとんど出土しておらず、当該期の遺構の片鱗すら掴めていない状況である。

こうした現状を踏まえた上で、今後の検討課題を提示するならば、①調査に当たっては、上層の遺構によって調査が阻まれないよう調査地を厳選したうえで、銀山開発初期段階の遺構検出が見込る場所に、可能な限り下層まで掘り下げられる調査面積を確保し、地山に達するまで掘り下げを実施する。②現段階で、16世紀前半

～中頃の遺構・遺物が確認できない原因について、再検証を行うことであろう。再検証では、単純に当該期の遺構面まで達していないのか、何らかの原因により、失われてしまったものなのか、或いは、遺構そのものが存在していないのかまでも含めて検討し、一定の見解を示す段階にきているのではないかと思われる。

石見銀山遺跡の開発時期を考古学的に解明すると言う、調査開始当初からの大きな命題を解決するためにも、調査にあたっては、最下層まで掘り下げると言う、強い意志を持って臨む必要があろう。

6．まとめ

16世紀代の遺構・遺物の実態解明や、江戸幕府成立前後の問題など、未解決な課題はあるが、陶磁器を指標として石見銀山遺跡全体の変遷について論じてきた。本論にあわせて、陶磁器の変遷図も石見銀山７期を加えるなど、修正・加筆を行っている。本文中でも一部述べているが、各期には、細分が可能と考えられる箇所もあり、今後、調査の進展により修正・加筆を行う予定である。ただ、本論は考古学的な見解を論拠としており、文献史学など他分野の見解についてはすり合わせを行っていない。他分野の見解も加味した銀山独自の画期が示されれば、それに沿った変遷図の作成が必要となり、新たな段階に進むことになろう。

鉱山町の変遷については、各地区の調査状況により、調査が不十分な地区においては、実態を正確に反映していない可能性が残るものの、全体としては大きく方向性は間違ってはいないと考えているが、調査の及ばなかった場所に存する小集落等については見落としている可能性がある。そのような可能性の残る地域については、消長表で破線表記としており、今後の調査の進展では、修正される可能性がある。特に、文献史料が飛躍的に増大する19世紀以降については、文献史学の手法による鉱山町の様相解明の方が、より詳細な復元が可能であろう(10)。

また、大森区域について、各地区消長表（第１表）では17世紀後半～18世紀前半にかけては破線表記としている箇所が多いが、町屋が断絶しているとは考え難い。このような調査成果となった理由としては、調査原因が浄化槽の埋設に伴うことが多く、調査地を任意で設定することができず、敷地の後背部や中庭部分であることが多いことが挙げられる。加えて、江戸期から建物等が立ち並んでいた場所には、現在も建物が建っていることが多く、建物の中心部分の調査が行え無いことも、原因と考えられる。町並み部分においても、調査地を厳選して、成果の得られそうな場所を計画的に調査する必要があろう。

以上、数多くの問題点を内包しつつも、鉱山町の変遷について、一応の見解を示してきた。５項で指摘した課題の中には非常に大きなものも存在し、今後解決していかなければならない問題である。現段階でも取り組める課題については、研究を進め、機会をみて検討を行いたい。

〈注〉

(1) 「陶磁器から見た石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告所１』の中で、陶磁器を石見銀山１期～石見銀山７期に分類し、編年案が提示されているが、石見銀山６期までであった。ここでは、この期に石見銀山７期をくわえるなど修正、加筆を行った。

(2) 時期区分は肥前陶磁器編年を基本としており、肥前陶器で最も古い岸岳系陶器が出現する1580年を石見銀山１期と石見銀山２期の境とした。本文中でも述べたが、石見銀山遺跡においては岸岳系の陶器はほとんど出土しておらず、1590年代以降の肥前陶器が主体となっており、実質的には1590年以降が石見銀山２期となる可能性が高い。

(3) 藤田組の大森鉱山は、明治19年当初は「藤田組大森鉱山」と称していたが、明治20年12月に「藤田組大森鉱山所」と改称し、さらに明治21年には「藤田組大森鉱山出張所」へ、明治25年には「藤田組大森鉱山事務所」へと社名を変更しており、「藤田組大森鉱山所」銘の製品は明治20年に「藤田組大森鉱山所」の開所に合わせて発注されたものと推定される。

(4) 福石鉱床は火山角礫岩が鉱化作用を受けて形成された鉱染型鉱床で、仙ノ山山頂東側の標高270m～500m程度の比較的高所に形成された鉱床である。このため、福石鉱床を対象とした地区は必然的に高所に位置している。

(5) 銀山の発見については、「銀山旧記」などの記載から大永６（1526）年とされてきたが、近年の研究

で、現在は大永７（1527）年とするのが有力である。

(6)　現在までのところ、焼土層、焦土面が確認されたのは、熊谷家地点、柳原家地点、小川家地点、大森座南地点などである。

(7)　藤田組が明治期に官公署宛に提出した文書の控えである「要書録」によると、明治21（1888）年に鍛冶場建築の届けを提出しており、検出した遺構はこの鍛冶場跡と考えられる。

(8)　「要書録」には、鍛冶場と同様明治21（1888）年に、同所に逆Ｌ字型をした選鉱場の建築届けを提出しており、規模、形態からも、「要書録」に記載された選鉱場と考えられる。

(9)　藤田組の製錬所で使用された陶器製のルツボは、銀山周辺の曽根窯、肥田窯などから採集されており、周辺の窯から供給されたことが判明している。同様に「藤田組」銘の石見焼も周辺で焼成された可能性があり、西尾克己氏は「石見銀山遺跡出土の石見焼について」（『古代文化センター研究論集　第17集　近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター）内で、「藤田組」銘の土瓶と肥田窯採集の土瓶の類似性について言及している。

(10)　文献史学の分野で、景観の復元について研究した成果としては、参考文献に挙げたものの他に、藤原雄高氏の「貸借証文にみえる19世紀の鉱山町の様相」（『石見銀山遺跡テーマ別研究報告２』島根県教育委員会・大田市教育委員会）などがある。

〈参考文献〉

島根県教育委員会・大田市教育委員会他『石見銀山遺跡総合調査報告書』Ⅰ　1999

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　2005

大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ　2013

大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』１～８　1992～1997

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』９～14　1998～2004

大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』15～26　2005～2018

大田市教育委員会『史跡石見銀山総合整備事業報告書別冊　１　史跡石見銀山総合整備事業に伴う発掘調査報告書』2013

大田市教育委員会『町並みと銀山遺構確認調査概報１』2003

島根県大田市『重要文化財熊谷家住宅主屋ほか五棟保存修理工事報告書』2005

島根県教育委員会・大田市教育委員会『世界遺産　石見銀山遺跡の研究１～８』2010～2018

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書１・２』2011・2017

島根県教育委員会『石見銀山論集』2002

島根県教育委員会『石見銀山関係編年史料綱目』2002

大田市教育委員会『石見銀山遺跡宮の前地区発掘調査概報』2002

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡調査ノート６』2007

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山　近代史料集』第１集～第３集　2016～2018

島根県古代文化センター『島根県古代文化センター研究論集代17集　近世・近代の石見焼の研究』2017

島根県教育委員会『世界遺産石見銀山とその文化的景観関連資料集』2008ｋ

大田市教育委員会『石見銀山ことはじめseriesⅠ』2018

石見銀山展実行委員会『輝き　ふたたび　石見銀山展』2007

島根県古代文化センター『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』2013

中野　義文『銀山社会の解明―近世石見銀山の経営と社会―』　清文堂出版　2009

九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000

山根　俊久『石見銀山に関する研究』　臨川書店　1969

大橋　康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』　佐賀県立九州陶磁文化館　1984

西田　宏子・大橋　康二『別冊太陽　古伊万里』　平凡社　1989

大橋　康二『古伊万里の文様　初期肥前磁器を中心に』　理工学社　1994

大橋　康二「日本海地域における肥前陶磁の流通」『佐賀県立九州陶磁文化館　研究紀要　第５号』佐賀県立九州陶磁文化館　2007

九州近世陶磁学会『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』2002

江戸遺跡研究会『図説江戸考古学研究辞典』　柏書房　2001

小野　正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』№.2　1982

森　毅「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器」『土器・陶磁器から見た織豊期城郭』1999

森　毅「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通―大阪の資料を中心に―」『ヒストリア』　第149号　大阪歴史学会　1995

上田　秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№.2　1982

森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№.2 1982

藤澤　良祐「瀬戸美濃大窯の編年」『瀬戸市史陶磁史編四』1993

山陰中世土器検討会『第７回山陰中世土器検討会資料集　山陰地方における備前焼』2008

山陰中世土器検討会『第９回山陰中世土器検討会資料集　山陰地方における瀬戸・美濃陶器』2010

関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究Ⅱ』1992

関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究17　近世初頭の海外貿易と陶磁器』2009

関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究18　消費地からみた国産陶磁器の出現と展開』2010

織豊期城郭研究会『織豊城郭　第７号　特集織豊期城郭の土器・陶磁器』2000

佐伯昌俊・西尾克己「須佐焼に見る近世地方窯の一様相」『山口考古』第32号　2012

遠藤浩巳「大田市・石見銀山遺跡の調査と出土陶磁器」『松江考古８』1992